

イエス様は、ヨハネから洗礼を受けられたあと、ガリラヤ湖で魚を獲っていた漁師たちに声をかけて弟子にし、カファルナウムの会堂で教えを語り始められました。今日の箇所は、イエス様の公の活動が始まった時のお話ですね。

ユダヤ教の礼拝では、聖書の朗読を担当すると、その人は、読んだ後で語る権利が与えられており、この日には、イエス様にその機会が与えられたようです。そして、何かお話をされたのでしょうか、すると、人々が驚いたことには、イエス様は「律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになった。」と言うのです。だいたい、普通は「学者など勉強を積んだ人には権威がある」と思うのですが、どうも、「律法学者のようにと権威ある者」という表現は、ちょっと事情がある言い方ようです。

律法の基本は、モーセを通して与えられた十戒です。これは大変大切な教えで、最初の4つは、人間が神様との関係を大切にしなければならない教えが書かれていて、後半の6つは、人間が人間同士の間で、お互いを大切にしなければならない教えが書かれています。(⑩教派によって分け方が少しちがいます)

でも、それは具体的にはどのように守ったらいいのか、当時のユダヤの社会では、十戒がさらに細かく規定されて、613もの掟があったようです。具体的な問題を考えたんですね。

十戒の4番目は、「安息日を聖としなさい。」ですが、これは「安息日には働いてはいけない。」ということになります。仕事場で働くだけが労働ではありません。自然に対して、人間が化学変化をおこさせることはすべて労働です。たとえば、歩くことも労働になります。しかし、安息日だからと言って、歩かないわけにはいかない、ということで、それじゃ、安息日にはどれくらいの距離までは歩いてよいか、問題になり、800歩まではいい、ということになりました。

この掟について、垣間見られる聖書の箇所があります。

たとえば、使徒言行録第1章12節に、弟子たちが、安息日にエルサレムの東にあるオリブ山に行ったことが書かれています。

「使徒たちは、「オリブ畑」と呼ばれる山からエルサレムに戻って来た。この山はエルサレムに近く、安息日にも歩くことが許される距離の所にある。」

このような律法の解釈がとても大切なことだったようで、律法の専門家である律法学者たちは、十戒を細かく注釈し、議論していたのです。おそらく、安息日の会堂の中でも、彼らは聖書が読まれると、「ラビの〇〇先生はこうおっしゃった。」と、人々に語ったのでしょうか。

ところが、この日にはイエス様が、「律法学者のようではなく、権威ある者としてお教えになった」と言うのです。どうもイエス様は、細かな解釈にとらわれるのではなく、思い切ったものの言い方をしたようです。イエス様の教えは、今日の箇所には書かれていませんが、マタイなどでは教えがわかります。

マタイ5章の「山上の説教」のところですが、(腹を立ててはならない)

「あなたがたも聞いているとおり、昔の人は『殺すな。人を殺した者は裁きを受ける』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。兄弟に腹を立てる者はだれでも裁きを受ける。兄弟に『ばか』と言う者は、最高法院に引き渡され、『愚か者』と言う者は、火の地獄に投げ込まれる。」(21～22節)
(復讐してはならない)

「あなたがたも聞いているとおり、『目には目を、歯には歯を』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。あなたを訴えて下着を取ろうとする者には、上着をも取らせなさい。だれかが、一ミリオン行くように強いるなら、一緒に二ミリオン行きなさい。」(38～41節)

ここには、律法の根本的精神と申しましょうか、このおきてがあるのは、実はこういうことを神様は言いたいからだ、と、神様のみ旨を徹底的に明らかにし、深めて、解釈し直しているイエス様の態度が見えます。当時の律法学者たちは、「昔〇〇というラビは、こう言われた」という言い方で、伝統的な解釈を説明したのですが、イエス様の場合は「わたしは言うておく。」という言い方で語り、自分はすっかり神様のみ旨を理解している。そのみ旨というのはこういうことなのだと、はっきり宣言しているわけです。

つまり「殺すな。そう十戒で定められているね。でも私は言う。その教えは、ただ殺すという行為のことを言っているのではない。人をバカだと言って、その人格や価値を軽んじたとき、それはその人を殺すことになるのだ。それがいけない、と神様は言っているんだ。」

これがイエス様の教えでした。これは、ある意味、極端でとてもついてゆけない教えです。だからこそ、聞く人はびっくりします。「とてもそれはできない。でも確かにそれが神様の本当に伝えたいことなのかもしれない。」と聞く人々は考えたのではないのでしょうか。そんなふうに、イエス様の言葉は衝撃的であったのでしょうか。

それが、「権威ある者としてお教えになった」ということの意味です。律法学者たちが、昔の宗教家の解釈を例にあげながら、ちょうど、官僚の書いた文章をそのまま読むような演説をするようなものですが、イエス様の場合は、神様の代弁者として、堂々と語る演説のようなものだったのでしょ。

イエス様にそれができたのは「イエス様が父なる神様と一つになっていた」ということの結果だろうと思います。毎年今頃はアメリカの大統領が一般教書演説をします。オバマ大統領のスピーチは有名でしたが、演説原稿を書いていたのは、ジョン・ファヴローという30歳前の若いスピーチライターだったそうです。このジョンさんはオバマ大統領の考えをよく聞いていたので、その気持ちが手に取るようにわかり、立派なスピーチが書きあがったのでしょうか。イエス様は、神様との対話、つまり祈りによって、神様のみ旨をわかろうと常に努力していたために、それが叶ったのだらうと思います。

ところで、今日の福音書の部分で面白いのは、会堂に集まった人々は、イエス様のことをなかなか理解できないのに、汚れた霊と言いますか、悪霊は、イエス様が神の聖者であることを見抜いていることです。これはどういうことでしょうか。

不思議なようにも思えますが、わかる気もします。

おかしなたとえかもしれません、警察官とすれ違った時、一番びくびくするのは、おそらく指名手配中の人でしょう。罪を犯していない人は、警察官を恐れる必要はありません。でも、制服を着ていない、私服の警官であっても、それを見分けることは、逃亡中の犯人には、大切なことでしょう。私服の警官を見破るほどの敏感さを悪霊は持っていたのでしょうか。だから、イエス様が誰であるか、すぐに見分けて、逃げ出したわけです。

さて、私たちはイエス様の言葉に、悪霊さえ逃げ出すほどの権威がある、ということをもう一度考え直して、その価値を正しく受け入れることが必要のように思います。私たちは、カファルナウムのユダヤ人のように、イエス様の声を、聖書を通して聞いているのですが、悪霊のように恐れを感じているのでしょうか。(別に恐れる必要はないかもしれません。どちらかと言えば、信頼を置いているか、ということになるでしょう)

私たちは、日頃いろいろなことに恐れを感じています。特に年末に年賀状やクリスマスの便りを作っていると、2024年の秋からは、ハガキが63円から85円。封書が84円から110円になるなど、みんなの生活が苦しいのに物価の値上げで、不安な年になるような気がします。

しかし、イエス様の言葉には、大変な権威があるということをお忘れなさい。私たちが生命の不安を感じる時、弟子たちが舟に乗って逆風でこぎ悩んだ時のことを思い出します。風に向かって「黙れ、静まれ。」と言われたり、「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない」と言われたような、イエス様の安心感を与える言葉が必要に思えます。

私はイエス様の言葉の中で、一番頼りにしているのは、最後の晩餐の時、「私の父の家には住まいがたくさんある。」と言われた言葉です。

この世に生を受けて、いつの日にか、遅かれ早かれ、この世を去ることが分かっている私たちは、死んだらどうなるのか、わかりません。イエス様が単なる人間の一人なら、あの世のことを言ったって、見て来たような嘘を言う、講釈師かペテン師みたいなものです。しかし、もし、本当にこの方は、死ぬことを恐れている私たちを安心させるために、神様から遣わされた救い主だと信じられたら、私たちは本当の信頼を置いて、歩めるでしょう。

私たちは、改めて、神様の言葉が肉体をとってこの世に来られた、そのイエス様の口にされる言葉に、権威を感じ、信頼を置いて、それに従うものでありたいと思います。

(蛇足ですがカトリックとルーテル教会の場合は、区切り方が違って、前半が3つ、後半が7つということになっています。①主が唯一の神であること ②偶像を作ってはならないこと(偶像崇拝の禁止)が、この二つの教会では、一つにまとめられて、(1)わたしのほかに神があってはならない。となり、⑩隣人の家や財産をむさぼってはいけないこと が(9)隣人の妻を欲してはならない。(10)隣人の財産を欲してはならない、となります。ルターは元々は、カトリックの修道士だったので、カトリックの分け方とおなじなのでしょう。内容は同じですが、ユダヤ教の分け方は私たちと同じです)